

先人の歩みをみつめて

本田和子

——教育は、考えてばかりいては解けぬところがある。いわんや、論じ合つてばかりいては、ますますことむずかしくなるのみである。試みて見るにかぎる。そこには、あんがいに多くの可能も見出される。おのずからなる会得にも到るというものである。

試みるには少しばかり勇気がいる。少なくとも無精者であつてはならぬ。工夫がいる。独創がいる。しかし、それが故にこそ、真の楽しさもまた伴うというものである。

一定の型と、くりかえされる手順と、それによってラクラクと保育すること、保育されること、これほど幼稚園に真の楽しさを失わせるものはない。子どもに。然り、いっそう、先生に。——

(「倉橋惣三選集」第三巻より)

日本の幼稚園の歩みも、今年で一世紀を数えると言う。百年という歳月の流れを追うなら、そこには、様々な変遷が跡づけられるであろう。制度や法令の推移や施設の増減は、その時代に、当時の社会の中で、保育施設がどう評価され、どのように位置づい

ていたかを物語るものとして、興味深い資料に相違ない。また、その時々を代表する指導者たちの動きやその理論をたどることも、保育界の動向を抑^{おさ}える上で、有益な手がかりとなるであろう。

然し、保育史の真の中味は、現場の^まにない手である保育者たちと、その時々^{とき}に子どもであった人々によって作り出されてきているのではないか。日本の幼稚園保育が百年の歴史を持つ^もつ^つというこ^ことは、百年の間、幼児保育の灯を守り続けた保育者たちと、そこに集う子どもたちとが存在した、ということと同義なのだ。

優れた実践家を中心にして、幼稚園創設百年を記念する座談会を持つ^もつ^つとしたのは、上述のような意味あいで、歴史の中味に触れようとする試みであった。ここに掲載したのは、その中心メンバーであった菊池、鈴木、海氏の実践談である。

わが国の保育史をふり返るとき、一九三〇年代という一時期は、ことさら色鮮かな、活気ある実践の時代として、私どもの眼をとらえる。それは、若々しい保育者たちと、のびやかな子どもたちとによって、大胆な模索が次々と試みられた時代であった。

海氏の発言の中で、「自由教育の短命さ」が指摘されている。

一九三七年には日中戦争が開始され、戦時色の強化される教育界にあって、子どもたちの自発的で自由な営みを教育の中心に据える試みは、壁にぶつからざるを得なかったのであろう。

然し、実戸健夫氏も指摘するように、この短命な一時期は、現在のわが国保育諸理論の源流とも言うべき三理論、すなわち、倉橋、城戸、山下の三氏の理論を出現させている。そしてそれらと表裏をなした実践が展開され、それが現代の営みにまで濃い影を落としているという意味で、見逃すことのできない時期なのだ。

海氏も言及されているように、戦後の歩みが再開されたとき、保育者たちは一様に、戦前、すなわち一九三〇年代の実践をふり返り、それを継承しようとしたと言う。戦時体制という異常事態の下に、正常な発展を阻止されていた一時期を括弧の中に入れて、それ以前との連続を考えたのであろう。この歩み方の可否はしばらく問うまい。ともあれ、こうして戦後の保育の源流は、一九三〇年代に求められようとしたのだ。

過去とよばれるときの実践を跡づけようとする場合、活動の種類や保育形態など、文字記録を通してある程度うかがい知ることの可能な部分もある。然しそれらが、保育者たちのどのような「つもり」の中で、「どのような心の動き」を通して展開されてい

ったかをとらえることは、なかなか困難であらう。しかも現実の保育実践の中では、これら保育者たちの「つもり」や「つもりと実際とのずれ」或いは、そこに生じる惑いやその克服など、一人一人の「内側の世界」が、重要な位置を占めているのだ。同一の理論に支えられているはずの実践が、それぞれの保育者によって全く異なった展開を見せるのは、よく知られたことである。

この座談会では、一九三〇年代の若い保育者として、いきいきと実践に取り組んだ三人の先達の口から、それぞれの模索の過程と、その中で確かめ得たことがらが、生の言葉で語られていった。私も後を歩む者たちは、そこから多くを学ぶことができよう。冒頭に引用した一文のように、「試みて見出された可能、そしておのずからなる会得」、さらに勇氣ある実践、工夫と独創の後に生まれた「真の楽しさ」が、これら先達の口から語られるとき、私どもは時間のへだたりを超え、主義や主張のちがいを超越した「保育の本質」をそこに見出すことができるのである。

子どもと向き合う——無構造の構え——

菊池氏の発信は、震災後のバラック園舎の、最低限の設備の中で、のんびりと子どもたちと過ごす日々だった。先輩たちの業績も、日本最古の幼稚園としての歴史を物語るものも、何も無かつ

たと言う。氏が保育の手がかりとしたのは、眼前の子どもたちの生きる姿以外の何ものでもなかった。

鈴木氏の場合は、この傾向がより顕著である。菊池氏が学生時代から尊敬する師として倉橋氏を仰ぎ、その指導に接する機会も多い職場で実践を開始したのに比して、鈴木氏の方面館託児所での保育生活は、全く誰の指導も受けず、誰の理論にも依らないものであった。氏が子どもたちと共に、一日一日を創り出していったのである。鈴木氏はその談話の中で、「何も知らなかった」「これ以外にしようがなかった」とくり返し語っている。氏は保育者としての養成を、特別に受けてはいなかったと言う。そのゆえに子どもたちと白紙で向き合い、その真白な心に映じた子ども像だけを手がかりとする以外に、すべもなかったのである。結果として、氏の談話の中から、保育の原点とも言うべき魅力的な実践が、いきいきと浮かび上がってきている。

海氏は、二十四歳の若さで公立幼稚園の主任保育者としての責任を負わされている。より若い保育たちとちえをよせ合い、相談し合いつつ、歩一歩、手探りで進んだ歩みの跡が語られている。型にはまった「恩物保育」から抜け出した頃、年齢の差も、級の壁も除いて試みた「ままごと遊び」の中で、子どもたちは存分にその生活性を発揮してみせる。その子らの動きから、次の展開を模

索しようとする当時の営みが、氏の談話の中から浮かび上がってくるではないか。氏の瞳に大きく映じた「力を持つ子ども」の存在が、氏を保問研の運動へ参加させるきっかけとなったらしい。

いずれにせよ、子どもと共に手探りしていった実践の日々の中に、現在の氏を支える保育の萌芽がすべて潜んでいたであろう。

「子どもと向き合う」これが三氏に共通の姿勢であり、三氏の保育の基盤でもある。そしてそれは、いわゆる「児童中心主義」というような概念的な言葉で括られるようなものとは、若干、その性質を異にしている。「〇〇主義」或いは「〇〇保育」などと、色わけしたり分類したりするには、余りにも基本的に根源的な保育の原風景がそこにはあるのだ。

菊池、鈴木、海の三先達は、分類的見地から色わけするとすれば、必ずしも同じ色彩に染められる保育者ではない。それぞれに置かれた地盤も異なっている。然しここで語られている保育の実態は、国立附属幼稚園、倉橋門下生とか、或いは、セツルメント保育運動の推進者、保問研の熱心な活動家などという、社会的分類を超えて、原点に立った保育のありようを差し示している。三氏三様に、それぞれの眼が、子どもたちをひたとみつめ、その瞳に映じてくる子どもたちの姿と四つに取り組もうとして、毎日の営みが展開されているのだ。

もしここに時代の特色を見ようとするとするならば、それは次のように要約することができるのではないか。すなわち、「自分の眼で子どもを直視し、自分によってとらえられた現象の意味を、自分で解くことを通じて、歩一歩前進しようとする保育者たちが、ようやく育ってきつた時代」であった。そしてそれは同時に、「自身の感じたことを自身の課題として、自ら思考し、自ら決定しつつ、自身の生を切り拓いていこうとする女性たちが、徐々に現われ始めた時代」でもあった。

「保育の新しさ」とは

三氏の実践談は、新鮮に私どもの耳を打つ。「当時としては」という限定ぬきに、それらの実践は現在の私どもにも新しく響く。もちろん、保育形態や保育方法も新しくなった。例えば鈴木氏の試みは、まさに最近の話題である「年齢混合の縦割り保育」であり、「級の壁をはずした解体保育」でもある。また、菊池氏をはじめ三氏が共通に語るのは、保育項目や領域を超えた生活全体の総合である。私どもが最新の課題として話題にするようなことがらはすべて、この時代に既に試みられていたというのであろうか。ところでそれらにも増して、私が新しさを感じさせられるのは、保育者その人のみずみずしさである。

菊池氏の感いは、中心的なテーマによる誘導と、子どもからの自発性とのかわりにある。そしてその感いと悩みをかかえて倉橋氏に詰め寄り、それなりの結論を得るまでの過程を、具体的に語ってくれている。「お話を聞くのがいやだ」と逃げ出す子どもと、その子どもを抱きかかえてお話を始める保育者との間には、それこそ子どもと四つに組んだ緊張関係がある。困惑しつつ、迷いつつも、決して息を抜かず、適当にごまかさないのである。中心的なテーマを設定することの可否はここでは問わない。子どもの「自発性中心」という大前提、すなわち「たてまえ」と、純粹にただ待つだけでは何も出てこない現実との間に立って、ひたすら追求する保育者の姿が、この上なく新鮮なのである。

鈴木氏の場合も、その新しさが、氏の談話の中に鮮かに浮かび上がる。子どもたちと給食の買い出しに行き、炊事の手伝いをさせる。そんな生活教育の実態を語りつつ、氏は、「幼稚園でいろいろなことは何も知らなかったが、毎日の生活がとも楽しかった」と位置づける。保育者の意図と子どもの願いとがうまくかみ合わない場合の悩みに関しても、お互いが本心を出し合い、本気になって怒り、謝り、許し、などして、行きつ戻りつ、生活が創り出されていく過程を語って、「生活の本番」ととらえる。出現したことがらをとらえる視線と、それを位置づける思考が、

常にみずみずしいのである。

海氏の談話の中には、当時の公立園の保守性が指摘され、一例として「奈良の大仏さん」の歌が引かれている箇所があった。就任早々の若い保育者として、氏はその歌の古めかしさに反撥している。それを、氏は「この歌にどれだけ共感し得るか」という表現で語る。子どもたちと視線の高さを同じくしようとする姿勢のにじみ出た言葉と言えよう。氏は「ままごと」の中で、「メートル調べ」をする子どもの姿を例示している。そんなことを口にする四歳児に接して、新鮮な驚きを感じたに相違ない四十年前の氏の姿が、ここからも浮かび上がってこないだろうか。恐らくは園生活の中に、子どもたちが「こんなにも生の生活を持ち込んできている」という、そのことへの驚きであったろう。そしてそれらの発見が、「素顔の出せる環境」を強調する氏の現在にも連なっていると言えないだろうか。

これらの談話を通じて、私どもが感じさせられるのは、「出来事の新鮮さ」にも増して、「常に新鮮に子らと取り組む人々」の「内なる新鮮さ」である。三人の先輩たちは、絶えず再考と模索をくり返して、みずからに問いかけ、問い返す努力を怠らない。不断の反省と自戒と、自己検討がそこにはある。そしてそれらがすべて、生活の創意を生み出しているのだ。

保育者を育てたもの

一九三〇年代の保育界は、研究者たちが指摘するように、倉橋氏、城戸氏など、優れた指導者に恵まれ、それらの理論と実践が結びついて新しい展開を見せた時代である。ところで鈴木氏は、それらに触れる機会もなく、子どもとの取り組みだけが毎日を生み出していった、とくり返し語っている。しかも、氏の実践は倉橋氏ならば「さながらの生活」と讚え、「出かけ保育」と喜ぶであらうような、みずみずしさに満ちていることは、先にも触れたとおりである。また、その縦割り集団による生活訓練は、後に形成されていった集団主義保育論ともよく重なり合う。「何も知らなかった。ただ勝手にやっていただけ」と氏は主張するのだが、氏の歩みは、まさに一九三〇年代の息吹きに満ち満ちているのだ。

海氏の姿も、自由感に溢れている。「今日はいい映画を見にいく」と、二時頃帰ってしまう保育者たち。あるときは八時まで討論し合い、準備に時を費やす。そして、氏はそれらの体験を一つの課題にまとめ上げていく。すなわち、「職員集団の人間関係」。以後それは子ども集団の問題と共に、氏のテーマとなっていく。鈴木氏にしろ海氏にしろ、新しい理論に啓発され、リードされる以前に、自身の感受性と自身の生活のしかたが、自由でありのびやかである。もしかしたら、そこにこそ時代の特色が見出され

るのではないか。すなわち、これらの人々は、大正自由主義の申し子なのである。

鈴木氏は、自身の中に、色濃く影を落としている女子大教育の影響を認めている。海氏は逆に、自身の受けた教育に対しては、反撥の意を表しているが、当時の女子教育を「良妻賢母主義」と批判し、芸術的人生に憧れをよせるほどに、氏の自由感が育っていた、ということになるうか。

菊池氏は、学生時代からデューイに魅され、アメリカの新教育に共鳴していたと言っている。

これらの人々は、自由が標榜され、芸術が価値とされたにおいやかな時代に生長している。こんな時代の空気が、絶えず新しく生きようとし、子どもたちの新鮮な感受性に共鳴し得る、そんな女性を育て上げたのではないだろうか。

そして、当時の社会は、情報網が未発達であった。そのゆえに、彼女たちは、やたらに流れこんでくる他者の動きにわずらわされることなく、自分たちの心ゆくまでに、その模索をくり返すことができたようである。鈴木氏がある機会に、次のようなつぶやきを聞かせてくれたことがある。「私たち三人は、お互いに知り合いでもなく、何の連絡もなく、当時は全く別々に保育活動を展開させていた。にもかかわらず、大変よく似たことを考えつ

つ、共通の実践をくり広げているように思える。考えてみると不思議だ。情報網の未発達な当時から、一人一人は孤立していたの」と。

情報網が未発達で、お互いがお互いをわずらわすことのない当時代だったからこそ、それぞれが、独自の歩みに徹することができたのではないか。そして、そこに、同じ時代の申し子としての共通性が反映され、共通の方向が生まれてきたのであろう。主体的な眼をもった人間が、自由感に満ちて子どもと向き合うなら、そこには、自ずからある方向が生まれてくるに相違ない。そして、それは、保育の原型とでも言うべき、本質的な部分から成り立つものであるに相違ないのである。

保育界における「一九三〇年代」には、様々な観点からの接近が可能であろう。ここでは実践をになった「人」に焦点を当て、一つの時代的特色を見ようと試みた。その結果そこに見出されたのは、「時代的な個性」でもあると同時に「保育という営みにかかわる普遍性」でもあった。保育の、そして保育者の新しさとは、常に時間を超えるものと言うことになるうか。三人三様であるはずの、これら先輩たちの歩みの跡をみつめるとき、しみじみと思わされるのは、このことなのである。

(お茶の水女子大学)